
[成果情報名] 調合油乳剤苗浸漬法によるイチゴのナミハダニ防除

[要約] 定植前に調合油乳剤（商品名：サフオイル乳剤）300倍液に2～10秒苗浸漬することで、イチゴのナミハダニを処理後1か月程度低密度に抑制できる。

[キーワード] イチゴ苗、ナミハダニ、防除、気門封鎖、苗浸漬

[担当部署] 病害虫部；病害虫チーム

[連絡先] 092-924-2938

[対象項目] 野菜

[専門項目] 病害虫

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

促成イチゴ栽培において、ナミハダニは苗を介して本圃に持ち込まれるため、定植までの防除が重要である。しかしながら、本虫は各種化学合成殺ダニ剤に対する薬剤抵抗性を発達させており、防除が困難となっている。一方、気門封鎖剤に分類される「調合油乳剤」は薬剤抵抗性発達リスクが低く、ナミハダニに対する殺虫効果が高いものの、浸透移行性に乏しく、散布による処理ではムラが生じて安定した防除効果が得られにくい。そこで、調合油乳剤を活用した、定植前のイチゴ苗のナミハダニに対する新たな防除方法を開発する。

[成果の内容・特徴]

1. 展着剤（ポリメチルメチルシリコン3000倍）を加用した調合油乳剤300倍液に、定植前のイチゴ苗を2～10秒間浸漬する「調合油乳剤苗浸漬法」を考案した。本処理により、ナミハダニの密度をおよそ1か月程度抑制することができる（図1）。
2. 調合油乳剤苗浸漬法は図2に示した手順に沿って行う。本圃植栽本数を6500株/10aとする場合、本処理に必要な作業時間は作業員4名でおよそ0.75時間/10aである（データ略）。

[成果の活用面・留意点]

1. イチゴ栽培におけるナミハダニ防除技術として活用する。
2. 調合油乳剤300倍液のイチゴ苗浸漬は令和2年9月9日に適用拡大されている。
3. 本処理に要する作業時間は、9cmポリ鉢を40株詰めたコンテナごと浸漬し、2カ所同時にそれぞれで2人交互に実施した条件にて算出されており、コンテナの形状や作業員によって作業時間は前後する可能性がある。
4. 本処理には、病害に汚染されていない健全な苗を用いる。また、薬害の発生を助長する恐れがあるため、生育不良苗や老化苗、採苗から日の浅い若苗の利用は避ける。
5. 品種「あまおう」において、本処理によって、数日程度の出蕾および収穫期の遅延が発生する可能性があるため、活着を遅らせないように留意する。葉裏に油浸斑、加えて一部の株で赤色斑点が発生する場合があるが、いずれも生育への直接的な影響は認められていない。

[具体的データ]

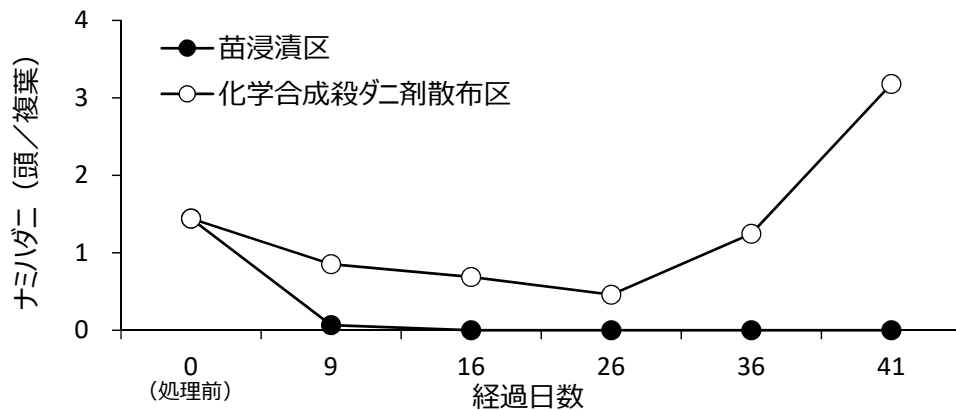


図1 調合油乳剤苗浸漬のナミハダニに対する防除効果（平成29年）

- 注） 1. 供試株は、品種「あまおう（福岡S6号）」で、9cm黒ポリ鉢で育苗し、葉数が4～5枚のもの
2. 処理日は平成29年9月27日で、苗浸漬区は調合油乳剤苗浸漬法、化学合成殺ダニ剤散布区はビフェンザートフロアブル1,000倍とシエノピラフェンフロアブル2,000倍を混用しイチゴ苗の茎葉へ十分量を散布し、どちらの区も風乾後に定植した。



①コンテナに詰めた苗を薬液にゆっくり浸す。苗を完全に沈める。



② コンテナを軽く揺らし、葉が重なり合う部分にも薬液をしっかりと付着させる。



③引き上げたコンテナを軽く傾け、残液を除去する。植え穴に苗を広げ、風乾後に定植する。

図2 調合油乳剤苗浸漬の作業手順

[その他]

研究課題名：新開発資材・農薬・植物生育調整剤等の適用性検定

予算区分：経常、一部法人等受託（九防協）

研究期間：平成28年、平成29年、令和2年、令和3年、令和5年

研究担当者：上村香菜子、伊丹春衣、清水信孝、柳田裕紹、桐明紗織

発表論文等：九州病虫害研究会報. 第65巻